



宮坂昌之

**Masayuki
Miyasaka**

大阪大学大学院医学系研究科・免疫動態学

日本免疫学会 会長就任にあたって

このたび平野俊夫会長の後任として第15代日本免疫学会会長に就任することとなりました。任期は2006年10月1日から2年間です。大変に光栄なことでありますが、同時にとても重い任務であると痛感しています。微力ながらも全力を尽くしたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

さて、日本免疫学会は今や約6,000名もの会員をもち、世界の免疫学をリードするに至っています。そして、2010年には第14回国際免疫学会議を開催することとなり、改めて会員の皆様方の総力を結集することが必要となっています。その中で、本会はNPO法人としての新しい発展の機を迎え、より開かれた、より柔軟性のある、学会運営が必要とされています。平野・前会長が委嘱した「学会あり方委員会」からは現在、多くの改革案が提示され、私はこれらの案を積極的に検討し、時代に即した理事会の構成や運営形式などを考えていきたいと思ひます。

また、日本免疫学会を取り巻く社会環境も変動し、当学会のさらなる発展と成果が期待されています。なかでも、アレルギー、自己免疫、感染症などの免疫関連疾患の克服(疫を免れる)、および高齢化社会の中での免疫系の賦活化、再生の促進(免疫力の増進)などに関する研究は、これまでもまして社会的要請度が高くなり、社会への成果の還元が強く求められています。このような研究でのブレークスルーを生み出すためには、私は「新しい血」が必要だと考えています。過去約30年間、日本免疫学会は素晴らしい研究人材を生み出してきましたが、今後さらに「若い血」による日本から世界への独創的な研究の発信と展開が必要です。そして、そのためには、若い研究者がユニークな研究をするための環境整備が必要であり、健康的な競争原理の確立が必要です。私は会員の皆様方のご協力を得て、このような課題についても新しい方向性を模索し、積極的に対応していきたいと考えています。

このほかに、一般の人たちの免疫学への理解を得ることも必要であり、このためには、マスコミ、一般の人たちへの積極的な「免疫学キャンペーン」も必要だと思います。既にヨーロッパでは「免疫の日」を作るなどの活動が始まっています。この点についても是非、皆様方のお力をお借りしたいと思っています。Newsletter、インターネットなどを介して遠慮のないご意見をどしどしお寄せください。

なお、私の就任に伴い、庶務幹事は中山俊憲教授(千葉大)、副庶務幹事は三宅健介教授(東京大)、会計幹事は烏山一教授(東京医科歯科大)、国際交流幹事は高津聖志教授(東大)と小安重夫教授(慶應大)をお願いいたしました。

どうか皆様方からのご提言、ご指導、ご支援をお願い申し上げます。